

# モラン大佐とシルヴィアス伯爵

— コナン・ドイル作「マザリンの宝石」の成立について —

飯塚 聡

Colonel Moran and Count Sylvius:  
On the Formation of Sir Arthur Conan Doyle's "The Mazarin Stone"

IIZUKA Satoshi

## Summary

There are some similarities between two of the Holmesian short stories by Conan Doyle, 'The Adventure of the Empty House' (1903) and 'The Adventure of the Mazarin Stone' (1921). The latter is a novelisation of his drama, 'The Crown Diamond' (premiered 1921), which has the same plot of the novelised version. We'll inspect the three works, and verify that 'The Crown Diamond' is a dramatisation of 'The Adventure of the Empty House', and that the two villains, Colonel Moran in "The Adventure of the Empty House" (and also in "The Crown Diamond") and Count Sylvius in "The Mazarin Stone", are originally the same character.

## 1

『ストランド・マガジン』(*The Strand Magazine*) 1921年10月号に掲載され、その後ホームズものの最後の短篇集、『シャーロック・ホームズの事件簿』(*The Case-book of Sherlock Holmes*, 1927) に収録されたコナン・ドイルの短篇小説「マザリンの宝石」('The Adventure of the Mazarin Stone') は、ドイル自身によって書かれたホームズ劇、「クラウン・ダイヤモンド」('The Crown Diamond', 1921年5月2日初演<sup>1)</sup>) を小説化したものである。小説と戯曲のどちらが先に書かれたものであるかについては、確証となる資料は無いらしい。<sup>2)</sup>しかし、ワトソンを登場させながら彼を語り手とせずに途中で退室させてしまっていることや、場場がベーカー街のホームズの部屋に固定されていて、最後まで一歩も外へ出ないという物語の展開を考えれば、「マザリンの宝石」の物語が元は舞台劇として構想されたものであることは、

明らかである。<sup>3)</sup>

そして、戯曲「クラウン・ダイヤモンド」は、以前に書かれた別の短篇小説、「空き家の冒険」(‘The Adventure of the Empty House’, 1903)<sup>4)</sup>を劇化したものである、と筆者は考える。従って、「空き家の冒険」と「マザリンの宝石」とは、実は同一の物語の変形なのである。以下このことを検証したい。

## 2

シャーロック・ホームズは「最後の事件」(‘The Final Problem’, 1893)<sup>5)</sup>で、宿敵モリアーティ教授とともに死亡し、『ストランド・マガジン』のホームズ譚の連載は一旦終了した。しかし、実は死んでいなかったということにして、失踪していた主人公を復活させ、ホームズもの短篇の執筆を再開した最初の作品が「空き家の冒険」である。<sup>6)</sup>「空き家の冒険」と「マザリンの宝石」を較べてみても、ホームズの姿の蠟人形の使用など、共通点がいくつかある、という印象を受ける程度であるが、「クラウン・ダイヤモンド」を媒介させてみると、両者の関係がよく見えてくる。「クラウン・ダイヤモンド」と「マザリンの宝石」とが同一の物語であることは、両者を読み較べれば一目瞭然であろう。ともに、盗まれたダイヤモンドの奪還を依頼されたホームズが、自分に生き写しの蠟人形を利用して、ホームズの部屋にやって来た犯人とその手下を罠に掛け、ダイヤモンドを取り戻した上、捕縛するという筋書である。

以下では、筋書や物語を構成する諸要素を比較検討することによって、「クラウン・ダイヤモンド」が「空き家の冒険」を劇化したものであることを論証する。

## 3

「空き家の冒険」と「クラウン・ダイヤモンド」に共通して現れる要素のうち、主要ないくつかの項目について検討してみたい。

### 1) 敵役

「空き家の冒険」は、「最後の事件」で死んだ悪役モリアーティ教授の一味の残党の一人で、モリアーティに次ぐ大物であったというセバスチャン・モラン大佐(Colonel Sebastian Moran)を逮捕する話である。「クラウン・ダイヤモンド」に敵役として登場するのも、このモラン大佐である。

短篇小説「マザリンの宝石」は、戯曲「クラウン・ダイヤモンド」と同じ筋書であるが、悪役の名前がネグレット・シルヴィアス伯爵(Count Negretto Sylvius)に変更されている。これは、小説の世界ではモラン大佐が既に「空き家の冒険」で逮捕されてしまっているためである。そのためシルヴィアス伯爵には、モラン大佐の名残りを見出すことができる。(これに

については以下の「事件」、「空気銃」、「猛獣狩り」などの項でも言及する。）

「クラウン・ダイヤモンド」と「マザリンの宝石」に犯人の手下として登場するボクサー、サム・マートンは、「空き家の冒険」にベーカー街のホームズの部屋の見張り役として名前だけ登場した辻強盗パーカー（Parker）に相当すると考えられる。

## 2) 事件

「空き家の冒険」中の主要な事件はロナルド・アデア青年の殺害と、その後のホームズ殺害未遂である。アデア殺害の動機は、カード・ゲームのいかさまを見破られたモラン大佐による口封じであった。

「クラウン・ダイヤモンド」と「マザリンの宝石」では、主たる事件は宝石盗難であるが、「クラウン・ダイヤモンド」で、ホームズが自ら調べたモラン大佐の過去の犯罪を列挙する台詞の中には、モラン大佐のカードのいかさまを発こうとしてモラン大佐に殺されたいアーバスノット（Arbuthnot）という若者への言及がある。<sup>7)</sup>ただし、この件は「マザリンの宝石」では割愛されている。「空き家の冒険」との重複する要素が多くなり過ぎるのを避けたのであろう。

モラン大佐がカード・ゲームをするという設定は、「クラウン・ダイヤモンド」にも、名残りを留めている。モラン大佐の過去の犯罪の数々を知っていることを取引きの材料として、ホームズは「大佐はカード・ゲームをなさいますよね。切札が相手の方にある時は、時間の節約のためにも早く降りた方がいいです」<sup>8)</sup>と言って盗んだ宝石のありかを白状させようとする。この前後の会話は「マザリンの宝石」にも、ほぼそのまま残されている。

ホームズ殺害未遂については、「クラウン・ダイヤモンド」のモラン大佐と「マザリンの宝石」のシルヴィアス伯爵がともに、ホームズに似せた蠟人形を本物と思って撲殺しようとステッキを振り上げたところを、本物のホームズに制止される場面<sup>9)</sup>にその名残りが見られる。

## 3) 変装

「空き家の冒険」では、死んだものと思われていたホームズが三年ぶりにワトスの前に姿を現わす。ロナルド・アデア殺害現場付近で、本を抱えた老人の姿に変装している時にワトスと出会ったホームズは、後刻その扮装のままワトスの部屋を訪れ、古本屋の振りをしてワトスと暫く会話を交わした後、突然変装を解いてワトスを驚かせる。

「クラウン・ダイヤモンド」でホームズが変装したのは老婦人である。ホームズが失踪していたという設定はなくなっているが、変装を解かないままワトスが訪れているベーカー街の自室に戻って、ワトスをからかう。<sup>10)</sup>

「マザリンの宝石」でも、ホームズは老婦人に変装してシルヴィアス伯爵を尾行する。ただし、そのことはワトスやシルヴィアス伯爵との会話の中で語られるだけで、部屋に戻ってワトスと会う時には、既に変装を解いている。小説では既に、変装のままホームズがワト

スンの前に姿を現わす場面が他の作品で何度も描かれて来たために、この作品では割愛されたのであろう。

#### 4) 蠟人形

「空き家の冒険」でホームズは、ベーカー街の自分の部屋が見張られているのを知って、グルノーブルのオスカル・ムニエ (Oscar Meunier) の作る蠟人形を部屋の窓辺に配置する。人形を見て驚くワトスンにホームズは「ある人たちに、僕はあそこだと持っていてもらいたい理由があるからだ。僕は本当はほかの場所に居る時にね」<sup>11)</sup>と説明する。この人形をホームズと違って、向いの空き家の窓から狙撃したモラン大佐が、その現場を押さえられ逮捕される。

「クラウン・ダイヤモンド」では、タヴェルニエル (Tavernier) というフランスの人の人形師に作らせた人形が設置される。人形を見せられて驚くワトスンに、ホームズの使用人ビリー (Billy)<sup>12)</sup>が、「ホームズさんを見張っている奴らに、ずっと家にいると思わせておいて、こっそり出かけるためなんですよ」<sup>13)</sup>と、その目的を語る。

「マザリンの宝石」でもこれとよく似た場面が展開されるが、その際ワトスは、「以前にも一度、こういうのを使った」と、「空き家の冒険」での人形の使用に言及している。ビリーはそれに「僕が来る前ですね」<sup>14)</sup>と応える。これは、「空き家の冒険」と「マザリンの宝石」が、同一世界内での別の時期の出来事であると読者に印象づけることにより、物語全体が旧作の焼き直しであることに気づかれることを避けようとしたものであろう。「空き家の冒険」では、本物らしく見せるため、家主のハドスン夫人が時々人形の向きを変えていたが、「マザリンの宝石」ではこれはビリーの役目となっている。

#### 5) 空気銃

モラン大佐とシルヴィアス伯爵はともに凶器として空気銃を持っている。「空き家の冒険」のモラン大佐は空気銃でアデアを射殺し、ホームズ暗殺未遂の際にも同じ凶器を使用する。

「クラウン・ダイヤモンド」のモラン大佐も「マザリンの宝石」のシルヴィアス伯爵も、物語中で使用されることはないものの、空気銃を凶器として持っていることになっている。老婦人に変装したホームズがモラン大佐やシルヴィアス伯爵を尾行したのも、空気銃の製作者ストラウベンジー (Straubenzee) の仕事場があるミノリーズ通りであった。

「最後の事件」冒頭でワトスンを訪ねたホームズは部屋に入るとすぐに、空気銃を恐れてよろい戸 (shutters) を閉める。「クラウン・ダイヤモンド」で、老婦人の変装を解いたホームズが半開きだったカーテンを慌てて閉める<sup>15)</sup>のは、この場面の流用である。「マザリンの宝石」でも、ホームズは帰宅早々、窓際にいたビリーの安全を心配して、ブラインド (blind) を閉める。「最後の事件」ではよろい戸であったものをブラインドに変更したのは、この場面が旧作からの流用であることを悟られまいとしたためであるかも知れない。

## 6) 猛獣狩り

「空き家の冒険」では、ホームズは「皆さん、こちらは元英国インド陸軍のセバスチャン・モラン大佐、我等が東方帝国が生んだ最高の猛獣撃ちです。大佐、仕留めた虎の数ではいまだあなたに並ぶ者はないんでしたよね？」<sup>16)</sup>と言って、逮捕されたモラン大佐をワトスンと警察官たちに紹介する。そしてホームズは今回のモラン逮捕を虎狩りに譬える。ワトスンとともに自分の部屋に戻ったホームズが、モラン大佐についてワトスンに語って聞かせる時にも、虎狩りの件に言及する。「ある時までは彼は立派にやっていたんだ。彼は常に鉄の神経の持ち主だった。手負いの人喰い虎を追って下水溝を這いまわった話は、今でもインドで語り継がれている。」<sup>17)</sup>

「クラウン・ダイヤモンド」では虎狩りに関して、モラン大佐とホームズの間には次のような会話が交される。

大佐 ……俺を付け回していたのは、手下じゃなくて貴様自身だったってわけだな。  
何のためだ？

ホームズ 昔、虎狩りをなさいましたね？

大佐 いかにも。

ホームズ 何のためですか？

大佐 ふん、何のために虎を狩るかって？ もちろんあの刺激のため、危険を求め  
るためだ。

ホームズ それにきっと、国を荒らし回って人を喰らう害悪を取り除くということに満  
足感を感じていたのでは？

大佐 その通り！

ホームズ 僕の方も理由もまさしくそれです。<sup>18)</sup>

「空き家の冒険」のモラン大佐が「ある時までは彼は立派にやっていた」ことや、モラン逮捕を虎狩りに譬えたことは、上記の引用における、「国を荒らし回って人を喰らう害悪を取り除くということに満足感を感じていたのでは？」、「僕の方の理由もまさしくそれです」に、その名残りを留めている。

狩猟の達人という設定はシルヴィアス伯爵にも引き継がれている。ホームズはシルヴィアス伯爵のことを、「図太い男だ。おそらく君も彼の猛獣撃ちの評判は聞いたことがあるだろう。」<sup>19)</sup>とワトスンに語る。使用されている語彙を見ても、「空き家の冒険」のモラン大佐についての記述を基にしたものであることがわかる。上に引用した「クラウン・ダイヤモンド」におけるモラン大佐との会話は、ほぼそのままシルヴィアス伯爵との会話に流用されている。ただし「マザリンの宝石」では、「空き家の冒険」との重複を避けるため、「昔、虎狩りをなさいましたね？」は「昔、アルジェリアでライオン狩りをなさいましたね」<sup>20)</sup>と書き換えられている。

## 7) 悪魔

「空き家の冒険」のモラン大佐は逮捕された時、「悪魔め！」（“You fiend!”<sup>21)</sup>）とホームズを罵る。「クラウン・ダイヤモンド」でも、自分の過去の犯罪をホームズに調べ上げられていると知ったモラン大佐は、「悪魔め!!」（You – you devil!!<sup>22)</sup>）と言い、人形の振りをしていたホームズに宝石を取り戻された時も、「貴様、この悪魔め！なぜ貴様がそこにいる？」（You – you devil! How did you get there?<sup>23)</sup>）と言う。「マザリンの宝石」のシルヴィアス伯爵も、最後に「俺たちの負けだ、ホームズ。貴様はまったく悪魔だな」（“We give you best, Holmes. I believe you are the devil himself.”<sup>24)</sup>）と言った。

## 4

戯曲「クラウン・ダイヤモンド」には、「空き家の冒険」、「最後の事件」以外の旧作から取り入れられた要素もある。総理大臣と内務大臣が依頼人としてホームズの部屋を訪れたということもその一つである。二人の大臣は劇中には登場しないが、ピリーの口からワトスンにその来訪が語られる。<sup>25)</sup> これは「第二の汚点」（“The Adventure of the Second Stain”, 1904<sup>26)</sup>）に総理大臣とヨーロッパ問題相がホームズに仕事を依頼する場面を取り入れたものである。

「マザリンの宝石」には二人の大臣のほかに、もう一人の依頼人が設定されている。これも政府の高官であるらしいカントルミア卿（Lord Cantlemere）である。「クラウン・ダイヤモンド」は宝石の奪還と犯人の捕縛で幕となるが、「マザリンの宝石」ではその後、依頼人の一人、カントルミア卿がホームズの部屋にやって来る場面が描かれる。二人の大臣は物語中に登場させず、カントルミア卿だけを来訪させたのは、旧作の二番煎じであることを偽装するためであろう。

## 5

以上に見てきた如く「マザリンの宝石」のシルヴィアス伯爵は、「空き家の冒険」のモラン大佐が、「クラウン・ダイヤモンド」のモラン大佐を経て変形させられた結果である。「クラウン・ダイヤモンド」は、「空き家の冒険」をはじめとする数篇の旧作小説の諸要素を取り入れて書かれた戯曲である。特に「空き家の冒険」との共通点は多く、この二つの作品は、ほぼ同一の物語であると考えることができる。戯曲「クラウン・ダイヤモンド」の小説化である「マザリンの宝石」は、もとより原作となった戯曲と同一の物語である。従って、「空き家の冒険」と「マザリンの宝石」とは、もともとは同一の物語である、ということになる。「マザリンの宝石」は、小説「空き家の冒険」を原作とした戯曲「クラウン・ダイヤモンド」を、再び小説化することによって創られたものだったのである。

本稿は2001年12月8日、ポップカルチャー研究会（於・明治大学）にて、「モラン大佐とシルヴィアス伯爵 — コナン・ドイル作『マザリンの宝石』の成立についての一考察 —』と題して行なった口頭発表のための原稿に加筆したものである。

## 註

- 1) Sir Arthur Conan Doyle, compiled by Richard Lancelyn Green. *The Uncollected Sherlock Holmes* (Penguin, 1983), p. 250. ‘The Crown Diamond’からの引用は、すべてこの文献による。以下のこの文献を *Uncollected* と略記する。引用部分の翻訳はすべて筆者によるものである。
- 2) cf. *Uncollected*, p. 247.
- 3) cf. Sir Arthur Conan Doyle; William S. Baring-Gould ed. *The Annotated Sherlock Holmes* (Wings Books, 1992), vol.2, p. 750. 以下この文献を *Annotated* と略記。
- 4) 『シャーロック・ホームズの生還』(*The Return of Sherlock Holmes*, 1905) に収録。
- 5) 『シャーロック・ホームズの回想』(*The Memoirs of Sherlock Holmes*, 1894) に収録。
- 6) これ以前に、長篇『バスカヴィル家の犬』(*The Hound of the Baskervilles*) が、ホームズ失踪前の事件として、1901-1902年に書かれている。
- 7) *Uncollected*, p. 258. 「それにアーバズノットの件。この若者はリージェント運河で溺死しましたね。あなたがしたカードのいかさまを発こうとしていましたか。」
- 8) *Uncollected*, p. 259.
- 9) *Uncollected*, p. 256.
- 10) *Uncollected*, p. 252-253.
- 11) Sir Arthur Conan Doyle, *The Original Illustrated ‘Strand’ Sherlock Holmes: The Complete Facsimile Edition* (Wordsworth Editions, 1989), p. 561. この文献は『ストランド・マガジン』のファクシミリ版である。以下にこれを *Facsimile* と略記する。ホームズもの小説作品からの引用は全てこの文献による。「クラウン・ダイヤモンド」への言及に際しては、該当個所の *Uncollected* 版によるページ数を註記したが、小説作品については、本文を引用した箇所以外は註を省いた。
- 12) ビリーはホームズの部屋で来客の取り次ぎなどをするために雇われている少年。後期作品数篇に登場する。もとはウィリアム・ジレット (William Gillette) によるホームズ劇の登場人物であったのを、ドイルが自作の小説の取り込んだもの。ドイルによるもう一つのホームズ劇、「ストーナー事件」(‘The Stonor Case’, 1910)にも登場する。ジレット劇のビリーは、少年時代のチャールズ・チャップリンの持ち役でもあった。( *Annotated*, p. 28; 中野好夫訳、『チャップリン自伝 上巻・若き日々』, 新潮文庫, 1981, p. 120-146.)
- 13) *Uncollected*, p. 252.
- 14) *Facsimile*, p. 970. 「空き家の冒険」での蠟人形の使用について、「僕が来る前」と言っていることから、ホームズ失踪前の事件(従って当然「空き家の冒険」より以前)という設定の『恐怖の谷』(*The Valley of Fear*, 1915)に登場するビリーは、他の作品のビリーとは別人である、という解釈もある(北原尚彦『シャーロック・ホームズ事典詳注版 シャーロック・ホームズ全集 別巻』, ちくま文庫, 1998, 「ビリー」の頃, などを参照)。しかし、『恐怖の谷』が執筆されたのは、「空き家の冒険」よりずっと後であることから、原作者の勘違いによってここにビリーが登場させられたものであり、作者が複数のビリーを創造したわけではない、と筆者としては考えたい。ドイルの作品にはこの種の矛盾が非常に多い。
- 15) *Uncollected*, p. 253.
- 16) *Facsimile*, p. 263. このくだりの原文は, “This, gentleman, is Colonel Sebastian Moran, once of Her Majesty’s Indian Army, and the best heavy-game shot that our Eastern Empire has ever produced. I believe I am correct, Colonel, in saying that your bag of tigers still remains unrivalled?”
- 17) *Facsimile*, p. 566. 原文は, “Up to a certain point he did well. He was always a man of iron nerve, and the

story is still told in India how he crawled down a drain after a wounded man-eating tiger.”

- 18) *Uncollected*, p. 257.
- 19) *Facsimile*, p. 971. このくだりの原文は, “A man of nerve. Possibly you have heard of his reputation as a shooter of big game. It would indeed be a triumphant ending to his excellent sporting record if he added me to his bag.”
- 20) *Facsimile*, p. 974.
- 21) *Facsimile*, p. 563. さらに続けて, “You clever, clever fiend!” ... “You cunning, cunning fiend!” と言う。なお, A. Conan Doyle; Richard Lancelyn Green ed. *The Return of Sherlock Holmes* (Oxford UP, 1993), p. 335 の註によると, このくだりの三箇所の “fiend” はドイルの原稿ではすべて “devil” であった。
- 22) *Uncollected*, p. 258.
- 23) *Uncollected*, p. 263.
- 24) *Facsimile*, p. 976.
- 25) *Uncollected*, p. 252.
- 26) 『シャーロック・ホームズの生還』に収録。ヨーロッパ問題相 (Secretary for European Affairs) という役職名は架空のものらしい (北原, 『シャーロック・ホームズ事典』, 「ヨーロッパ問題相」の項)。

(本学非常勤講師)